

ケース 6

サンパウロ日伯援護協会と日伯友好病院（吉田 憲）

1952 年から再開された戦後移住者の来伯に伴い、その受け入れを支援することを目的として日本海外協会連合会(現 JICA)の提案により、サンパウロ日伯援護協会は 1959 年 1 月 28 日創設された。社会のニーズに沿いながら、今では、医療・社会福祉の 2 つの分野で事業を展開している。



1959 年サントス移民収容所から援護協会が始まる(提供: 日伯援護協会)

医療事業では、日伯友好病院、福祉部、サンミゲル・アルカンジョ病院、イタパチニンガ病院、リベルダーデ医療診断センター、サンパウロ州内 34 か所の巡回診療、病床は 500 を超える。社会福祉事業では、サントス厚生ホーム、さくらホーム、イペランジアホーム、あけぼのホーム、やすらぎホームなどの養護施設や自閉症療育施設(PIPA)を擁し、入居受入数は 270 人を可能とする。医師は 1,000 人を超

え、従業員数は 3400 名を超える中南米で有数の医療・福祉法人となった。日系社会のみならず、ブラジル社会への貢献を行っている。

そしてほとんどすべての施設で、社会福祉士、看護師、栄養士、造園等の JICA 日系社会ボランティア(現 日系海外協力隊)が 50 名以上活躍してきた。また、多くの職員が日系社会研修で日本の技術を学び、病院・施設運営に生かされている。

中でも特筆する施設は、日伯友好病院だ。工業関係に従事する移住者のための研修施設であった JICA の現地法人 JAMIC(移植民有限責任会社)の工業移住センター敷地を 84 年 1 月、安価に譲渡された。同年 2 月には歌手の北島三郎氏がサンパウロ市でのチャリティーショーの純益を寄付したり、日本国内でも援護協会の伝手を頼って募金が行われ、85 年「援協救急病院」として開院。



日伯友好病院の外観(提供: 日伯援護協会)

その後、1988 年、日伯友好病院として改称、30 床が稼働した。拡大した病院の落成式には、福田元総理、礼宮さま(現 秋篠宮殿下)、サルネイ大統領が出席した。ODA による資機材供与も行われた。現在では、鍼灸等も含め 46 診療科目、270 を超える病床を擁する。長く JICA の専門家を務め、同病院の日系医師を私費で訪日研修を続けられた山本富山大学名誉教授の名を冠した「山本恵一講堂」と命名されている。

(注: 山本教授は 94 年富山医科薬科大学教授を定年退官後、ブラジル「カンピーナス大学消化器病診断・研究センター」等医療プロジェクトにチームリーダーとして出血性消化器疾患の診断、治療技術の向上、貧困地域住民の医療サービスの改善に尽力した。02 年～07 年、私費で援協の日系医師を 2 人ずつ、一か月間、金沢医科大学で訪日研修を実施した。)

ブラジルでは、出産の現場では、帝王切開が主流であるが、2015 年からは保健省の国家医療サービス監督庁(ANS)が実施している安全分娩推進対策プロジェクト(自然分娩)に参加、最先端の設備が整った自然分娩室を開設している。自然分娩を国家政策にまで高めたのは、1996 年から東北ブラジルで実施された JICA 技術協力プロジェクト「家族計画・母子保健プロジェクト」などで累次にわたり推進された「人間的な出産と出生」の概念がブラジル国内・中南米域内に浸透した成果と言える。

現在では、ブラジル優良病院認定制度(ONA)では最高位の 3 つ星を幾度も獲得し、地域社会からの信頼が厚い病院となっている。

自閉症療育施設(PIPA)も挙げたい。元々は自閉症児を持つ援護協会の医師数人からの提案だった。ウルグアイで JICA シニア・ボランティアとして活動されていた三枝たか子さんによるサンパウロ大学での日常生活療法の講演会をきっかけに、その後、同氏がサンパウロに着任し、累次にわたりシニア・ボランティアが自閉症児への支援を開始、後に、武蔵野東学園(東京都)による草の根技術協力となった。三井物産からも毎年資金支援を受け、同社社員によるボランティア活動も行われている。

2022 年には、地下 2 階地上 5 階となる南米最大となる PIPA 本部ビルが開設。現在では、サンパウロ州政府からも生徒養育費の半額の補助金支援を受けており、ブラジル社会への療育普及も期待されている。



自閉症療育施設(PIPA)本部(地下 2 階、地上 5 階)(提供:日伯援護協会)

JICA は日系医療施設への支援を行うことによって、日系社会のみならずブラジル社会への貢献を行ってきた。まさに日系人・日系団体・日系社会がブラジル社会と日本社会をつないでいる。援護協会傘下の医療施設では、MRI 診察室の壁面いっぱいに富士山と桜が描かれている。心配、不安な患者の心に寄り添うと共に日本の象徴的な壁画を描くことによって、親日感をもってもらえるのではないかなと思う。こうした気配りこそが、日本とブラジル社会をつないできたサンパウロ日伯援護協会の核心だと考える。



MRI 室@リベラダデ医療診断センター(提供:日伯援護協会)